

志望と適性のあいだ

—進学選択にあたり思うこと—

青木 優 (進学情報センター)

20世紀も終わりに近づいた1999年に出版された「冷静と情熱のあいだ」という恋愛小説がある。江國香織と辻仁成の著名作家二人が交互に連載する形で展開されたストーリーだ。単行本化されたときは、『あおい』という女性目線から紡がれた江國担当の「冷静と情熱のあいだ—Rosso」、『阿形順正』という男性目線から紡がれた辻担当の「冷静と情熱のあいだ—Blu」、別々に出版され、それぞれベストセラーになった。このようなことを言われても、この記事を読んでいる人の多くは東大に在籍している前期課程の学生なので、産まれたばかりの赤ん坊か、それともまだ産まれてもないわけで、何のことを言い出すのかと怒られそう。それでもあえて、なぜ引き合いに出したのかというと、進学選択の相談をしている自分にとって『あいだ』という言葉の意味に対し、大いに共感を持ったからである。『冷静』と『情熱』は対義語ではないわけで、その『あいだ』には混ざり合ったり分離したりといった複雑な相互作用が存在する。これは、もしかしたら進学選択というイベントにおける『志望』と『適性』の『あいだ』と似たような関係ではないかと思いついたのである。よって、『志望と適性のあいだ』に立つかもしれない、悩める東大学生に何かアドバイスが出来ることかと思ひ筆を執ってみた(キーボードをたたいてみた)。

まずは『志望』についてである。そもそも東京大学に入りたいと思って入試を突破してきた学生にはどのような『志望』があるのか、これは、他の大学以上に複雑化しているといえる。なぜならば、入学時の分類が6科類しかなく、後期の進学先を2年の夏に決める(内定する)ことになるからだ。入学時の学生の意識は大きく二種類に分けられるように思う。一つは、入学する前から志望する学究分野の方向性が定まっており、その実現に向けて邁進するタイプである。中には、「主として進学できる～」と書かれている入学者募集要項をはじめとする様々な情報を見て科類を決めている人たちもいるだろう。もう一つは、まだ方向性が決まっていない(あるいは

決めていない)で入学し、前期課程で学んでいく中で決めていこうというタイプである。文理の方向も定まっていない人もいて、東大の教養教育の醍醐味を満喫しながら進学先を決めていくことになる。このような多様な意識をもって入学した学生を待ち構えているのが直前に触れた、「教養教育(リベラル・アーツ教育)」なる東大特有の学びのシステムだ。大学教育の序盤で専門分野を固定せず学ぶという「レイト・スペシャリゼーション」の概念は、承知をして入学しないと、とんでもない悲劇を生むこともあるのが現実だ。不本意であろうとも、用意された学びのシステムを前向きに受け止めてほしいと思う。さて志望の話に戻るが、志望する学究生活を送ることのできる進学選択先は、例えば入学前に思い描いたところ以外(意外)で実現できないものか、立ち止まって考えた方が良い場合もある。面談でもよく話をするのだが、自分の望む学びがそこにあるかどうかを判断するには、開講されている講義などの内容を調べるのはもちろんだが、進学先に所属する教員の研究内容を調べるというのも非常に有効だと思う。学科が作成するパンフレットに載っている専門分野のみならず、教員や研究室のホームページをたどっていけば、どのような学究分野に自分の身を置くことが出来るのか、想像できるのではないか。文科系の場合は、教員の著書が手掛かりになるかもしれない。このような材料集めは、方向性が決まっていない人の進路探索にも役立つだろう。教員の、まさに身を立っている研究内容の一端にでも触れてみれば、何か自分の琴線に触れるものが見つかるかもしれない。幸いなことに、前期課程では、教養学部内外の様々な授業が用意されているので是非参考にしていきたい。

次に『適性』について考えてみよう。例えば陸上競技において、スタートからトップスピードにのるまでかかる距離は他の人より劣っていても、そのスピードが特別速くなくても、持続力に秀でていたりペース配分の能力に優れている場合、その人には長距離選手としての適性があるといえる。逆に、持続力はないが、20-30 mまでのスピードが素晴らしく速く、フットワークに優れている場合、陸上競技ではなく、ラグビーのウィングやアメリカンフットボールのワイドレシーバーなどの選手としての適性があるかもしれない。このような、先天的か後天的

かを問わず備わっている各人の能力というのは、運動に限ったことではなくいずれの人にも存在する。もちろん、英語とか古文とか物理とか数学とか、ある教科についての理解が特別高いという類のものもそれに当てはまる。だがそういうことだけでなく、瞬発的な深い思考力を発揮することが得意な人、思考を長く持続できる人、五感のいずれか、または複数の感覚に優れ、他人が見過ごすような現象を見出すことが出来る人、手先の器用な人、話すことが上手な人など、それぞれに違った能力が備わっている場合、どのような場で活躍できるかは当然違ってくるだろう。余暇を使って自分のやりたいことをやるといった趣味のようなものならば、適性など深く考える必要がないかもしれない。しかしながら、将来のキャリア形成に必要なものを大学で身につけたいと考えるならば、得意なことが生かされる学究分野に飛び込んでいった方が良いのではないか。そうすれば、自らのモチベーションも自然と上がり、あたかも前からその分野が自分の居場所のようになることもあり得るのだ。ただし、進学先を選ぶ際に参考となる適性をどのように把握するか、これはなかなか難しい。まずは前期課程で受講した講義における、教員が出す評価は参考になるはずだ。評価が良いからといって必ずしも高い適性があるとは限らないが、おおよその指針にはなる。実際、「量子化学（今の構造化学）」の成績が良かった私は、その分野の道に進んでしまった。東京大学の前期課程では、幅広い分野の講義を受講することが出来るので、自分が今まで気が付かなかった自らの適性を発見することもあると思う。私が理系の教員という理由もあるが、基礎実験などは「手を動かす」ことにどれだけ適性があるか、「観察」や「観測」時の感覚にどれだけ優れているかを知るバロメータになると思う。初年次ゼミナール、総合科目、主題科目などもぜひ活用してほしい。また、自分では気づいていない適性というものもあるのかもしれない。友人や家族など身近な人たちとの触れ合いの中でも、自身の適性というものを探し出し、進学選択の役に立ててほしい。

そして、志望と適性の『あいだ』の話である。個人個人で、志望の種類も、適性の種類も千差万別なのだから、その『あいだ』には多体間相互作用により、それこそ無限大の可能性が秘められている。進学選択は、第一段階で単願、第二段階で何十もの志望を

複願で志望登録できる（第三段階もある）。この登録先を選ぶのに『あいだ』を逡巡し、志望の順番をつけて登録していくわけであるが、もう一つ『成績』という要素があるのを忘れてはならない。人気のある進学先は、これは時代とともに変遷していつているのだが、成績の低い人にとって越えられないハードルとなることもある。すると次善の策というか、オンリーワンでない志望登録が必要となる。進学情報センターには理系、文系、二人の専任教員がいて、主に進学に関する相談を受けている。迷いがあったり、助言が必要な時には、「後の祭り」とならないよう進路決定する前に是非足を運んでほしい。ただ一つ念を押して言いたいことがある。結局のところ、如何なる他人のアドバイスがあろうとも、最終的な選択をするのは自分自身であるということだ。「自分のケツは自分で拭く」という意志が、選択後における覚悟につながるだろうし、未来の人生を推進していく力となるはずだ。もし、当時の決断と違う方向に転換することになったとしても、悔いることはあるかもしれないが、以後の意思決定の糧になるはずだ。最後にもう一言だけ付け加えたい。「冷静と情熱のあいだ」の終盤では、あおいと順正がフィレンツェのドゥオーモで再会するという場面があり、クライマックスを迎えることとなる。しかし、小説としての終わりを迎えていても、二人の人生としては、十二分に余韻を残したものだ。そうなのだ、諸君の人生にとって、進学選択における「志望と適性のあいだ」は、序盤の一つの章が終わったというだけに過ぎないのだ。ひとまずは、真摯に選んだ自身の選択を自分自身で讃えてあげて、次なる人生の章に向けて志望と適性のあいだを再び探索してほしいと思う。